

## <第 87 回 HSE セミナー 講演内容>

### ■テーマ：「高齢者の家族状況と薬局への希望」

#### ■講師：樋口 恵子 氏 （NPO 法人高齢社会をよくする女性の会 理事長）

日本の代表する評論家として数多くの行政の委員会を努めてきた講師。厚生労働省の社会保障審議会の委員も歴任。民間委員として薬局に対してどのようなイメージを持っているのだろうか。業界内に縛られていると、どうしても世論が見えなくなってしまう。その結果が「薬局は特殊な業界である」と業界内も認めてしまう世界にしてしまったのではないだろうか。果たして国民は、行政はどのように薬局を見て、感じているのかを聞いてみたいと思う。専門家ゆえの薬剤師の「用語」「知識」のあたり前はあたり前ではないということに気がつかなくてはいけない。

#### <講師紹介>

東京大学文学部美学美術史学科卒業・東京大学新聞研究所本科修了後、時事通信社・学習研究社・キヤノン株式会社を経て、評論活動に入る。内閣府男女共同参画会議議員、厚生労働省社会保障審議会委員、男女共同参画会議委員、社会保障国民会議委員、消費者庁参与などを歴任。現在、評論家・NPO 法人「高齢社会をよくする女性の会」理事長・東京家政大学名誉教授、同大学女性未来研究所長・「高齢社会 NGO 連携協議会」代表（複数代表制）。

著者「私の古い構え」（文化出版局）「女一生の働き方（BB から HB へ）」（海竜社）など多数。

### ■テーマ：「保険薬局を取り巻く環境変化とマネジメント」

#### ■講師：赤瀬 朋秀 氏 （日本経済大学 経営学部長 同・大学院経営学研究科 教授）

「かかりつけ薬剤師」が新設され、地域の取り込みが求められるようになった。これは面対応に向けた改革といえるのではないだろうか。同様に医薬分業から 40 年。クリニックの開業ブームも同じだけ経過したといえるのではないだろうか。いつまでも門前クリニックが存在するとは限らない。この「時限爆弾」に気がついているだろうか。「全ての医療機関の処方せん」と掲示するだけでは患者はやってこない。では店舗の周辺環境はどうなっているのだろうか。どのようにして患者を取り込むのだろうか。門前から地域への視野の拡大がいま求められている。必要なのは「医療・介護・地域（住居）」の視点であり、それらをつなぐ「マネジメント」である。

#### <講師紹介>

平成元年、日本大学工学部薬学科を卒業、慶応義塾大学病院薬剤部に研修入局。同年 9 月より北里大学病院薬剤部入局。病棟薬剤管理室主任をとなり、平成 12 年に退職。平成 15 年に MBA、および博士（臨床薬学）を取得。衣笠病院薬剤科長に就任。済生会横浜市東部病院を経て日本経済大学大学院教授に就任。平成 28 年度より、同大学経営学部長に就任。会病院薬剤師部会の顧問を勤める。

### ■テーマ：「多職種チームで連携する在宅医療」～「自分らしく生きる」を支える～

#### ■講師：永井 康德 氏 （医療法人 ゆうの森 たんぼぼクリニック 理事長）

いまの在宅医療のトレンドは「自分らしく」である。久しく聞いていないが「住み慣れた地域で、住み慣れた環境で」というのが地域包括ケアのコンセプトである。病院での医療は「どう治すのか」であり、在宅医療では「どう過ごすのか」が重要だと在宅医達は言う。薬局の地道な努力が実り、薬剤師の取り組みが評価されてきている。次は薬局が地域に飛び出し、在宅チームが抱える問題を一緒に考え、スペシャリティを発揮する番である。薬を飲ませることも、止めさせることも出来るのは薬剤師だけである。薬剤師が思う「自分らしく生きる」ことへの提案はどこにあるのだろうか。薬を運ぶだけ、セットするだけでは評価がされない時代がすぐそこにある。

#### <講師紹介>

平成 4 年 愛媛大学医学部卒業 愛媛大学医学部附属病院、自治医科大学地域医療学教室を経て、愛媛県南部の 明浜町（あけはまちょう）国保俵津（たわらづ）診療所所長。平成 12 年 在宅医療専門診療所「たんぼぼクリニック」を愛媛県松山市に開業。平成 24 年 4 月 市町村合併の余波で閉鎖となった愛媛県南部のへき地診療所を西予市から民間委譲して引き継ぎ、医師複数体制でのチームで循環型地域医療を実践している。著書：「まんがで学ぶ在宅医療制度の基礎知識」「たんぼぼ先生の在宅報酬算定マニュアル」「楽なように やりたいように 後悔しないように」